

全  
の  
た  
ら  
し  
の  
全

中村俊定文庫  
文庫 18  
481



壬辰  
紀行

夏濃さるる

淡乘井



兼ヤらちりりきうく出る草鞋是  
にり成海一雲北降日る寒此是  
休坐一物ハ凌るく世凌り世綿  
子岩か乾旗とあり下馬雲と流  
持を籠も二藏三八ハ川付る川  
成と生渥成つか乾旅お乾  
花子眠り多し夢乾を驚く翌日  
馬子船渡のかさる女お別

夏夕部く後待きと胡く北列ヤキ  
あふま引さく名浅有り田植奇のやうに  
卯乃志夫かきく根あうく太平の誠  
成石一恐一北川けくく山是縦横  
に踏んぐ倒す石重く萩の原瓦ハ京右  
ハ伊勢路より道方石を見付く踏迷不  
市あぬ新、俳諧は流りまはるの本意  
ふく嬰は第世次流よと免臣一平  
返、新かくく、中川で住まぬ霞をく柱  
杖活路返りぬ岳よ攀のわりて妙岳

高哉子種北雪は載す千仞の懸泉  
そとそ入く消、盤根数十里陰ハ蒼然  
さくく北海の翠ハなま是仙境忘  
かく記一平古流竹の山と

干時明和壬辰年季夏六月  
石院兼井記





月の中は  
 山の麓は温泉に浴ぐ人と  
 旅の足跡を  
 口を  
 甘井

美し  
 梅雨の残り  
 谷は  
 下界

玉珮  
 指方

送鈴公遊妙光山

岬友

聞說妙光路崔嵬難皆前谷深餘雪積  
巖峻乱泉懸半嶺低震響中峯近日邊  
應多丘壑好請見幻輿賢

奉送鈴公遊妙高山

倉地正允

名山欲上出高堂才子翩二正促裝匆  
謂君元仙骨少飄然已使俗情忘

六月十七日

拓棘館

甘井

雨の白雨降つてきて夜明けれは  
以て秋の脚堂一牧のいつりけふれは  
波多の橋成河原より猿は尋ね来りて

公命海分都がや合歡の志

荒井よりして雨見こし晴り挑ハ四方のや  
くみ根幽よ歌手喜田尾色七一入子見返  
響れ響きあり川よかまきま田小  
並木のし末より又降嶺命を望むかあけ

石高またり足波踏やこふい杖と或を  
か風日しぞ旅者ありしるさよき侍あり  
岩よ腰お掛きハたハ危ゆるお立まるとこ  
さき下ハ遠ハ波流まの音而已成耳  
瀬まよハ屏也物や果おも

二本木北茶店のと清々々々友木立の陰  
すくし九山身自假山乃と

友山の折とくと我あまのうか

木の刺斗よ第一ハ乃驛村哉平たあし云  
者の新よやとと也

今日そ此新者権現乃祭禮ハ免一ハ比  
里のこくハ刀は横まハ木乃枝と御手  
沈ハ支乃子積く上よ登り乃火お付て  
ちやハ燃上ハ勝原とや又お志とくハ哥  
哉くきとく引あハハハ古代の婆おり  
よしとくおとくハハハ妙光山雲上  
つと名付苗圃細強乃無垂場ハ昔昔  
静ハハ青苔おのハハ清ハハ

流く上中川杉や葉おの勢

志の免れ夢とく驛路の鈴子破事

こゝ起也水もふ、今朝とやうなまのこ  
里乃道哉登りて而本よまま子唯雲霧  
の中にもりてゆゑの恐天哉分てぬくと  
一本杉よ若く夏哉馬とを欠いふと荷哉  
おろし安持とて三途川を渡りて  
蹴踏し市洗ふ垢ふし友心

其二一登りて此堂より二宿甲面出草  
堂の像二つ有り

月朧を折らぬとて、此の顔  
路羊腸を遠り橋下崖乃是日渡りて

湯平、若く

十八日 終日雨降

十九日 生乃刻より雨晴し、めづ日深し森

友山よ渡り輝きりれば

うらむ山々夏奈し、落霞

日影をより曇夜明乎、おさけり月さやの  
に暖き友涼し

二十日 快晴申共刻分強く曇

廿一日 快晴夜曇少し降

廿二日 朝雨降

孝ふり妙光山、禪心もたゞしく藤原郡  
川羽郡の邊より六七十人斗りて成婆城  
旅をたゞしと之連のゆゑにけり  
まふり葉師堂の湯坂を登りて此所に  
寶藏院を人た改る後のありて今青高田  
谷人のの會ふ内なるにゆゑとて之連  
たゞしとてたれ中へ軍入りたれり  
たゞしとてたれ中へ軍入りたれり  
申す刻分空晴日暮ぬれはたゞしとて  
山、たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か

月かの子はたゞしとてたれ中へ軍入りたれり  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か

とてたれもたれ刻斗りていづれも山を峽か

元三目

川羽郡の邊より六七十人斗りて成婆城  
旅をたゞしとてたれ中へ軍入りたれり  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か  
たれもたれ刻斗りていづれも山を峽か



此山の嶮難なる所を尋きあや——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——  
あやゆりしもの——

傳、連立んとて、諸子よとて、  
キニヤウと云坂と道、  
支方分木や生、  
谷く分重し起り、  
い渡り、  
云新有、  
堂子観音、  
乞と血の池、  
聲軍滝、

たし市軍も念仏の音もろしやと物の窟  
身垣成て下りてうしろの東きり  
大岩し傍よ見石と云も早も定成カラ  
セニシト名付たの方よ鏡の池有方一所  
右よ清くありて暗濁なり女と登りて六尺  
至る九尺四方板の堂よ小の洞佛  
八軒を此所よ志もくやまこ屋いふと  
けまひりて一坂横無板の先の十二  
之坪の子派をの卵よ是は禰免也  
登山しりて此より引力成添く

柳寺力とてけり子彼もて此より  
きく山しりて死を能く云と露い  
のりまのりしりて此の山登りぬ  
可此の山よと語いぬかくしり深く  
仏果とてと見けねまよと衣といや増  
貝指と見上きれ、言ふ言の一枚山  
やうく是の指が、家程の所と云い由  
くに下等毎山竹生重りて千仞の長あり  
平野ありてさしりありてなるは清い  
おもしろく清い水ありて唯称名乃多

而にかきよきつてきりぬけり及津よや  
才もふくて貝摺を越り

行よりと後りしむ乾山路り南

ふし一行尊僧正の志より外にちりぬけり  
深きしむをぬきぬか山にふん  
分りもふん化縁道よりといふは世  
貴衆生に守りぬ有難きよと此所は至り  
やふしよ入るてんし一及指大岩新く  
やふし百はけり本堂は東向し一と九尺  
四尺三寸の彌陀を祖言サニ尺中扉子洞仙二重厨子入和銅

年中裸形上人越後州頸城郡大崎の妙  
光山開基のし書付を胎内よりぬき

かろうきの舟は清くそは吞絶項は焼石の  
こにしむはしよ水守ふし一と水沃といふ  
権志しりりやあし限そ金蓋の蓋ありん  
やしよよ入る挿す乾清水

窟乃大黒辯才をよし下りし木曾義仲  
此窟の跡有り東西一丁余南北十丁半の  
きいし嶺峯を乾山岩霞く日寺川日本

岩ハニホ拾百斗けりれきとくき免たれ  
くもく或之子由一或地子匍匐せ造化  
天工何やのひ下あつりば得んや項上を本  
文あり一草村の中より南花有りそは折  
おほとこやういひ老青あつり告天子賛  
カシラ乃何割きりてゆき人直心地は花  
下向る後の方分地獄岩と云は又山竹  
地を分ける貝指の下出る而頻に降る只  
是よりゆる下約三里の道は未だ刻を  
りり湯本、若く

十四日 朝而降志く九晴午の刻斗分大雨

尾流

公存卿先生の書紙得る抄くよ

關山一壑秀青霄知有君孤嘯寂寥雲  
霧窟中殫冰雪神遊何域此道遙

華山中の昔言よ書きり先生と他く草木  
好し物産のとりきり此行よ置ん  
志ぬ草木と取んとは約十余種にあ  
や一き草花物よ其よ言よ不至るは恨  
子乃刻占而晴河漢歌詠し九窓故扉

けハ乱山花在ナ屹立一松柏御妻キ飛泉  
子入り蛇吐かくれハ噴然堂一冷風至

廿五日 朝微雨已の刻分大雨

薬師堂詣 奉納

南無や東方琉璃光如来いふまじハ末世  
無生と湊夜せんとおよさかた鄙み跡お  
無多ふと阿弥陀ふあ一旅教者に  
ふが億出お苦少一のいおぢぢり跡き平  
と日一旅教者の迹き此訓に至りて實  
お倡仰のそおかお多卯の志の陰

おのく一保一き似れ待佳もて月  
け一舎リりりおま子集り一た乃種子山  
しはき合きりるき恋旅中おとぬらん  
と和光同塵の交りからん

湯煙や少しも子銀る一雲ナ峯

廿六日 朝微雨暮強降

廿七日 終日曇微雨

廿八日 朝快晴申の刻曇

廿九日 快晴暮時少曇

川辺道途

友おい 誼下 早業と秋の氷

七月朔日 収晴

湯上りの袖 志免りやけの秋

ちりめて ちり上りよ 又い

尾よ 別きり 携り 扱くや 志免り

啼 虫いりとも 啼いぬ 箱虫 専之

旋るる 名残りし ちり川原の 中ちり

流波と 泉 研ふるよ 川の 陰 吟いり

柳原の おりし 神 仙を 無何や 漸に

やと 弦歌の 志と 以後り 萩 桔梗 乃已り

く白く ちりし れ 念きる 袖の 移馬の 夢人

此心 誠意よ ぬる 性天 象此 摺りし ちり

ちりしん

澄まして ちりし ちりし ちりし

彼の 伝 ちりし ちりし ちりし

ちりし ちりし ちりし ちりし

ちりし ちりし ちりし ちりし

二月 収晴

此頃の 降つて ちりし ちりし 天晴の 都入

ちりし ちりし

日北色は包んそ若し霧乃海

と川秋の暮に寶花院に訪り知りぬ

朝 京や日あし上る方の庭

二本木は過ぎ小出雲故地了るそ葎

のう村あり重腫の足るありし年

始、鳥しよ山、けししや多連さり

方よりおまふし

友 懐きさるは終

追 加

渥水の流痛より可月北雲と推

死んと世園の富士とゆえし地項、

重よりしゆしん足すこやぬる昔次

の厨者よいけし幼童とゆえ具

さふ杯うをそくも踏分がき及は

かよよしし青たをれいを侍し

けきしも

鞍馬亭

英司

強々美し懺悔しれししあまよ

甘井雅兄園の言根を登り海山次物渡  
軍とお世より一々

母國

筆に心をこめて書かば是れ誠新

守邦人かゝるにまをれを周山と名付  
新よいて湯乃有者かたあんとす  
海りのあまいらるゝやまといふ  
帰さぬあはれと申すやにあり  
とに其心あまら平をわらふ  
とに其心あまら平をわらふ  
道にまをれを筆

あまら平をわらふ  
海にまをれを筆  
海にまをれを筆  
海にまをれを筆

大河内氏  
直信

言はれ葉も妙か紙の香ひが  
やまのうひわの筆

鈴木則保雅君頃登妙香山峯  
飄然極眺望作其紀行亦乞  
友人於詩文與倭歌又諾  
賦以應其需

川口直英



本是溫泉地騷人行有期崎嶇巖面從深  
浚谷神知雲發馬蹄暗雪消鳥道披攀來  
跨虎石吟了臥龍厓絕踵憶九折明眸辨  
四維波濺紅日晷雨遶翠巖岐海舶渺如  
葉麓川澹似絲俯聞村鐘起仰聽窟磐滋  
禹穴藏謨典周田敷局碁仙掌穿趾去梵  
宇凌虛之岩樹焚鶯宿溪嶂猿抗移近臨  
仇嵩出遠指富峯壑寵辱何應識貴尊不  
敢忠劉郎猶可伴塵寰亦因誰

聞鈴公登妙光遙有此寄 出友

忽憶古時七十君妙光絕頂悵離群芙蓉  
嶠岬千年雪冥海蒼茫萬里雲山擁神  
人明翠色氣通帝坐動星文但看天下  
滔二者登岱一臨誰共云

耳井雅公  
か〜彼士峯よい〜此の峯  
に登りて一歩一歩  
冬之廟舎  
玉珮

涼——  
鈴君信宿干關山而賜書於岡氏  
因余見示捧讀可不慨然哉賦此

寄鈴君

倉地正允

古木長藤踏鬱森  
草庵高倚白雲  
陰知君獨在關山月  
更對清猿一夜  
深

聞鈴君登妙高山遙此寄 全

妙高幽谷可難過  
禹穴相尋令若何  
爲報君歸猶有贈  
持來片白雲多

野鶴子の返訪より  
中々礼の

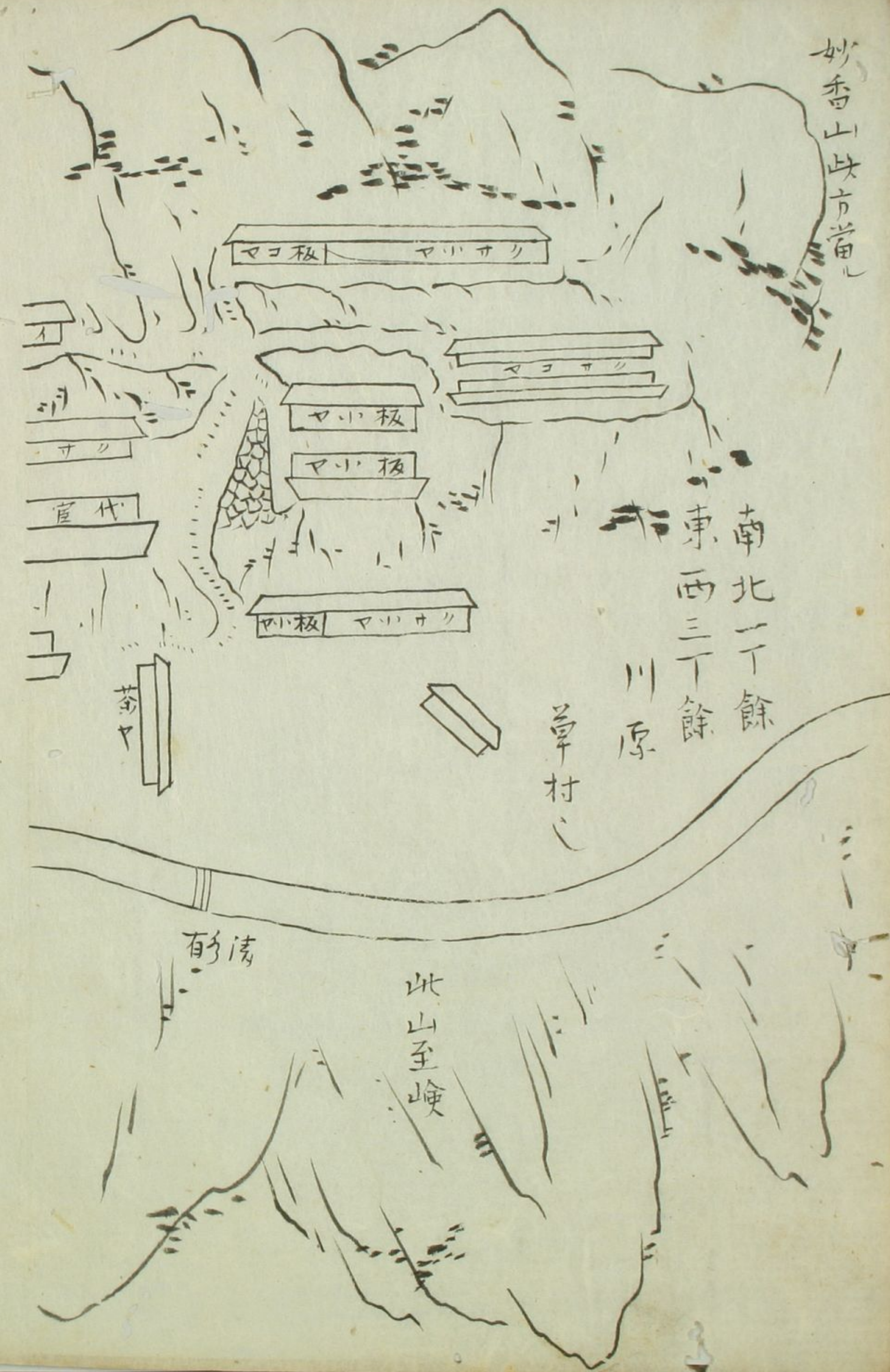
目しやうりま

野里亭  
野鶴

茶のまやさるりく  
ちる葉の尺



妙香山此方苗



南北一丁餘  
東西三丁餘

草村

川原

此山至嶮

有清水

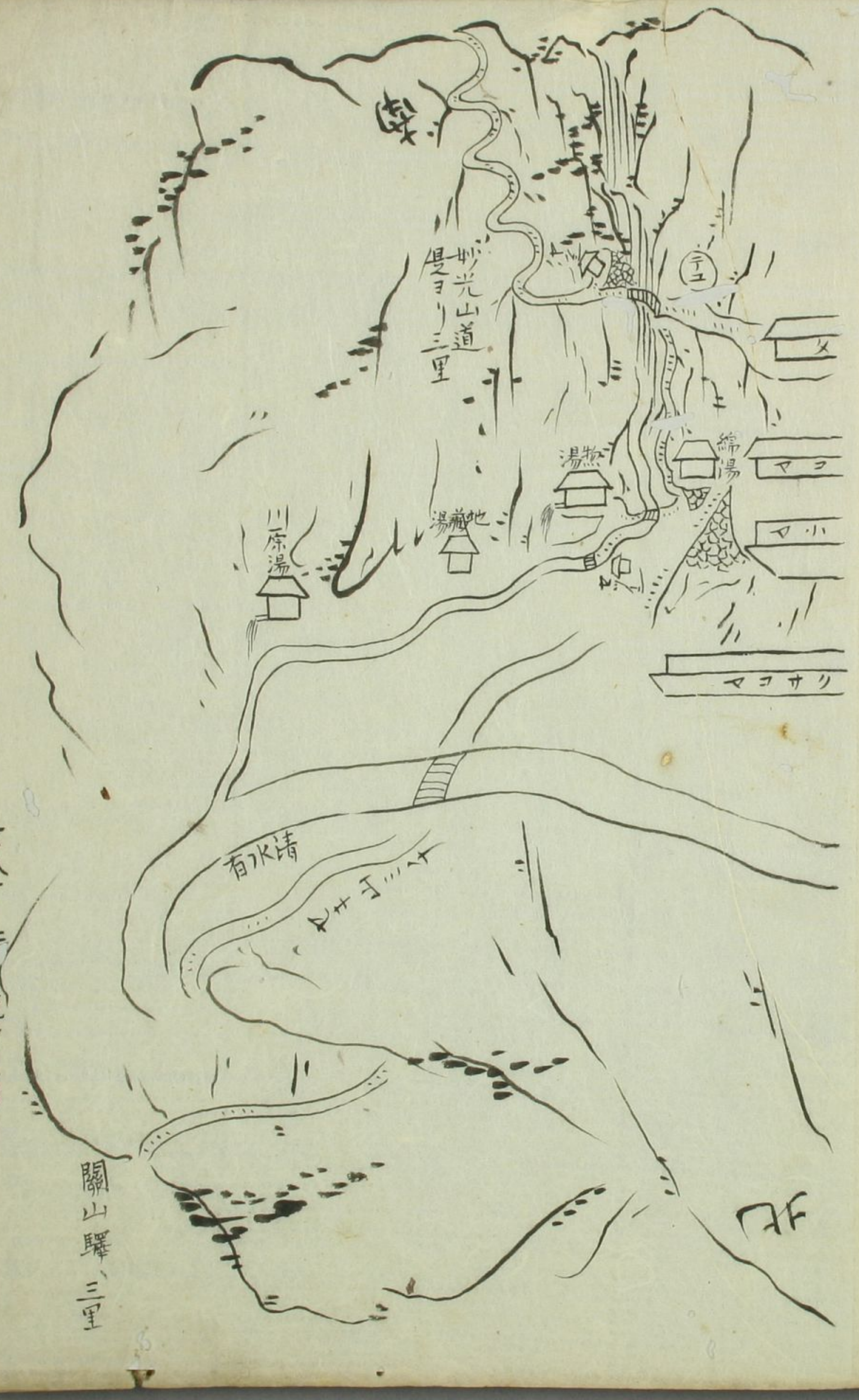
茶ヤ

官代

マコ板 マコサキ

マコ板  
マコ板

マコ板 マコサキ



妙光山道  
長ヨリ三里

川原湯

湯池

湯

マコサキ

マコ

マコ

有清水

マコサキ

關山驛三里

七八丁行 姥堂有リ

溫泉考

惣湯色潔白不甚熱也味酸澁而有臭油之氣浮於泉上使湯槽之板面滑也

川原湯色潔白熱亞於惣湯也味酸而口覺鐵氣

地藏湯色亦潔白微溫也味少酸

綿湯色不潔白其溫亦劣也味同上而其臭少硫黃氣

凡此四泉之所流土石皆為黃赤色深布帛亦為黃赤色再灑之奠茶汁則亦

茶褐色蓋亦帶綠礬之氣耶而不帶溫泉然其溪水之所流於其土石莫不悉然則疑鐵氣酸質耶未可知也按太沖氏溫泉考曰微溫愈瘡者為惡又曰味酸者澁者苦者俱大惡又謂深布帛為黃赤色深齒為紫赤色疑是鐵氣不佳又曰凡在泉衷覺肚內冷如城崎瘡湯及諸州愈瘡溫泉疑是掠洗金石二氣出來此二品大惡以此觀之此溫泉如其愈瘡與發瘡余雖未試而其臭味氣色之狀如此則不

甚佳者歟今畧誌其所見俟後人之辨正

鈴木則保定御記



溫泉考終

觀童瞳記

出友

頸城郡大崎鄉勝澤里在高城之南十

餘里山中其民某

曰喜石衛門

有男子曰某

曰安太師

生丑年矣童瞳也以其側陋編

戶小民高陽人初不知焉茲年季其鱸

定卿之浴于關山溫泉也聞有此物其

歸也過之欲觀之遇從其父母之樵山林

不在家矣已歸語友等曰不亦千載一

遇乎二三子盍往觀之於是乎穀且干

差與定卿谷伯充田顯龍夙出于南方  
之原秋日午乃至藤澤之村落則藜  
藿當戶杲羸覃宇甕牖繩樞不過容  
膝一老嫗在延客出兒見之皆觀之其  
目睛洞融精瑩而能映物覺其光運不  
凡豈古之所謂重瞳歟荀卿之言曰相  
形不如論心論心不如擇術形不勝心  
心不勝術至矣哉此言也遂作贊曰

姑唐邈矣 參眸此孩  
姚耶項耶 決之術哉

